

アブドゥ・トゥレ著

『アビジャンの雑業』

—不景気を救うイマジネーション—』

Abdou Touré, *Les petits métiers à Abidjan : l'imagination au secours de la "conjoncture,"*
 パリ, Éditions Karthala, 1985年, 290 ページ

鈴木裕之

はじめに

アフリカの大都市に身をおいてまず率直に感じることは、とにかくわけがわからないということである。いろいろな人間が集まってきて、さまざまなことをやっている。それらがフォーマルに組織されているというのなら、話は簡単である。それがどうもそうではないらしい。特に、大小さまざまな「通り」を舞台に活動している人々（そのほとんどは金稼ぎではあるが）を見ていると、どうにも要領を得ない。われわれの感覚からすると、どうしても堅気の商売をやっているとは思えないのだ。これらの都市を「ヴァイタリティあふれる人々の生活空間」と捉える好意的な人もいれば、「単なる無秩序」と非難する意地悪な人もいる。しかし、両者に共通して言えることは、やはりわけがわからないということに尽きるであろう。

たとえば、コートジボワールのアビジャン。現在人口200万人を超すこの都市は、西アフリカにおいてナイジェリアのラゴスに次ぐ規模を誇る。

試しにアビジャン市内を散歩してみるといい。大きなお尻に彩りも豊かにさまざまなパーニュ（アフリカの女性が日常着として最も広く用いている腰巻き）を巻き、その背中には小さな赤ん坊を、これまた色とりどりのパーニュでくくりつけて歩いている御婦人たちを見て、「イヤー、アフリカだなー」などと感慨にふけられるのは、ものの5分である。そのうちに、いろんな物売りが次々と目の前に姿を現わしてくる。まずは、両手に売り物のズボンを吊るして通りにポーッと突っ立っている青年。その彼をやりすごして歩いていくとすぐに、1人の少年が新聞・雑誌の類を目いっぱいかかえて近づいてくる。「フランス語のものもあるし、英語のやつもあるから、買ってよ」。少年に気をとられているすきに、マン

ゴーの入った洗面器を頭にのせた2人組の少女が背後から迫ってきている。「このマンゴー、ぜーったいに美味しいから買ってよ。ねー、お願いだからさー」、「いらない、いらない」と言いながら彼女らをふり切って一息つく。ふと道端を見ると、見すばらしい恰好をした一見乞食風の老人が、真赤な花片をつけた綺麗な花を両手に一輪ずつ持って、誰かがその花を買ってくれるのを、じっと座って待っている。

自動車に乗ってアビジャンを駆け巡ってみる。赤信号で停まると、いきなり3、4人の少年たちに取り囲まれてしまう。身の危険を感じて「ヤバイ！」と思った瞬間、少年たちはおもむろに洗剤とモップを取り出して、フロント・ガラスの洗浄を始める。運転手がいい人ならば、若干の収入が得られるというわけだ。

ちょっと買い物でもしようとして自動車を道端にとめ、店に入る。買い物からかえってくると、自動車の横に1人の少年が立っているではないか。「この車がイタズラされないように、オレが見張ってやっただからさ。ほら、アビジャンでワルが多いでしょ」などどうそぶく。やはり彼も、優しい運転手に巡り会えばお金がもらえるのである。

アビジャン市内でも、特にアジャメ地区のグラン・マルシェ（大市場）界隈の混雑はすごい。とにかく人、人、人の波。露店はあたり前のように道路にまではみ出している。自動車を駐車する場所など、とてもみつきりそうにない。「困ったなー」と思っていると、急に「ピッピー」と甲高い笛の音。「なんだ、なんだ」と音のする方を見ると、めっぽう血の気の多そうな青年が「ここに駐車できるよ」と手招きしている。「あんたのために、今朝からずーっとこの場所をとっといたんだぜ」などと平気で嘘をつく。ありがたくその場に駐車させてもらった後、血の気多い青年を怒らせると怖いので、駐車空間案内料として100 CFA ₣を渡す（1990年3月現在で、1円＝約1.9 CFA ₣）。

以上は、アビジャンで出会うことのできる、いろいろな人々のさまざまな活動のほんの一例である。

ところで、これらアビジャンの「通り」で見かけることのできる人々、彼らはいったいどこからやってくるのであろうか。なぜそういう生活をしているのだろうか。彼らの商売には、いかなる仁義があるのか。そういったことについては、実にわけがわからないのである。

そうした疑問を持つわれわれの要望に応じてくれそうなのが、ここに紹介するコートジボワールの社会学者アブドゥ・トゥレの著作である。

タイトルの「プティ・メチエ」(petits métiers)は、直訳すると「小さな仕事」となる。特に「通り」を舞台にして人々が営むさまざまな仕事、言ってみれば「都市の雑業」のことを、アブドゥ・トゥレはプティ・メチエと呼んでいる。いわゆるインフォーマル・セクターとほぼ同義であるが、本稿ではアブドゥ・トゥレの用法に従い、そのままプティ・メチエの語を用いることとする。

なお、アブドゥ・トゥレは社会学博士であり、現在はフランス開発協力科学研究所 (Institut Français de Recherche Scientifique pour le Développement en Coopération. 通称 ORSTOM) の研究員としてコートジボワールで活躍している。他に主な著作としては、『コートジボワールにおける日々の文明化——西洋化のプロセス——』(La civilisation quotidienne en Côte-d'Ivoire : procès d'occidentalisation, パリ, Éditions Karthala, 1981年)がある。

I 本書の構成

まず、本書の目次を示そう。

序説

第1章 昨日の景気、今日の景気——何ごととも以前のままだけではない——

第2章 タイヤの空気入れ屋から自動車見張りまで——社会的な課税——

第3章 バンコ沼の自動車掃除人——長続きする腰掛け仕事——

第4章 貧乏人の石鹼——プロオルン工場の廃棄物の回収——

第5章 コフィ・アクワとオフエイ・ニャルコ——巡回仕立屋——

第6章 サタ・シーラとファツマタ・ディアキテ——アボボ・ガール市場の足洗い——

第7章 路上の催淫剤——セックスのスターター——

第8章 アバック・ムハマ、トレッシヴィルの〈ワンザム〉(割札師)——生計を立てるための割札——

第9章 女性とパーニュの名前——活発な女性のイメージネーション——

第10章 足の爪・たこ切り、マニキュア塗り、理髪師、そして〈ヨモ・メーカー〉(毛染め屋)——トレッシヴィルの貧者の美容——

第11章 代書屋——合法的瀬戸際で——

第12章 サ・ビ・ジェからジェス・サ・ビまで——生計を立てるために描く——

第13章 巡回物売りたち——ドライバーのお得意先——

第14章 綺麗な芝生、美しい庭——持つ者に仕える持たざる者——

第15章 カフェ・ノワール、カフェ・オ・レ——小さな苦い豆の長い行程——

第16章 マルコリー・サン・フィル——仮設橋でひと財産——

第17章 巡回銀行、貧者の銀行——革命的銀行家——

第18章 万歳マキ! くたばれマキ——陰謀家の失敗——

第19章 国家とプティ・メチエ——持ちつ持たれつ——

第20章 教育の問題性——この親にしてこの子あり——

結論

序説では、コートジボワール国内および近隣諸国からの移民の増加を背景とするアビジャンの都市化、それに伴うプティ・メチエの出現が述べられる。

第1章では、プティ・メチエを生み出すコートジボワールの経済的背景を「不景気」という語に集約させて描き出している。

序説と第1章で、プティ・メチエをとりまく概況が述べられた後、続く第2章から第18章までの各章では、それぞれ任意に選ばれたプティ・メチエについての詳しい報告がなされる。その内容の豊富さは、先の目次を読んで想像していただきたい。

第19章においては、国家とプティ・メチエの実践者との間の競合・対立関係が扱われ、第20章では、プティ・メチエの実践者、路上生活者を生み出す元凶としての教育体制の不備が指摘される。

最後の結論では、プティ・メチエの性格をごく簡単にまとめている。

II 本書を支えるシェーマ

本書は1つのシェーマによって支えられており、そのシェーマは4つのキー・ワードから形成されている。そのキー・ワードとは、

アビジャン (Abidjan)

不景気 (conjuncture)

イマジネーション (imagination)

プティ・メチエ (petits métiers)

である。

「アビジャン」は何よりも本書の舞台となる都市である。フランス植民地時代の1934年からコートジボワールの首都であり、83年にウフェ・ボワニ大統領の生まれ故郷ヤムスクロに行政首都としての地位は譲ったものの、現在でもコートジボワール国内のみならず、西アフリカの経済的中心都市である。このアビジャン、実にアフリカ都市化の権化のような存在なのである。

国内各地からアビジャンへの人口流入は激しい。1985年、コートジボワール国内における都市人口は481万5000人で、全人口の47.3%を占める。さらに「1985年現在、全都市人口の52.9%、国内総人口の24.3%がアビジャンに集中し、この大都市は、低収入に嫌気が差し、経済の都でよりよい生活を送ろうと希望に燃えて地方を飛び出してきた多くの『文無し』でごった返しているのである」(15ページ)。

さらに、ブルキナファソ、マリをはじめとする近隣諸国からの移民も無視し得ない。「1975年の人口調査において……コートジボワール国内居住者の33%を外国人が占め、アビジャンにいたっては、その人口の40%が外国人である」(17ページ)、「路上で活動するプティ・メチエの担い手に占める外国人への割合は、全体の71%にも達している」(17ページ)。実に異常とも言える外国人の多さである。

また、全人口に占める若年層の割合も、プティ・メチエの主な担い手が若者であることと関連して、重要なポイントとなっている。「コートジボワール人の51%、外国人の43.3%が30歳以下であり」(18ページ)、アビジャンにおいては「その人口の52.8%が20歳以下」(18ページ)なのである。

こうして、本書の舞台となるアビジャンの性格が、「地方人口の流入」「外国人移民の流入」「若年層の多さ」という観点から浮き彫りにされる。大都市アビジャンは、その内に雑多な人口を抱えながら、プティ・メチエ出現の温床となっていくのである。

次に、アビジャンをめぐる経済的状況はどうなっているであろうか。

1950年代に始まり70年代末まで続く高度経済成長は「象牙の奇跡」(ミラクル・イヴォワリアン)と呼ばれ、その間コートジボワールは「不景気」という語を知らなかった。「景気のよい時に、景気のことを話題にして暇をつぶす必要などあるだろうか。……ついこの間までは好景気だった。だから景気なんてことばは、人々の頭のなかにはないも同然だった」(29ページ)。

しかし、「象牙の奇跡」は、この国の国庫収入の約6割を占めるコーヒー、ココアに全面的に依存していた。1978年から始まるコーヒー、ココアの国際価格の下落に伴い、この国にも「不景気」という語が頭をもたげてくる。「こうして不景気は他人事どころのさわぎではなくなり、深刻な現実としていきなり目の前に現われたのである」(31ページ)。「それ以来、バスのなか、グバカ(ボックスカーを改造した小型バス——引用者)のなか、マキ(アフリカ料理のレストラン——引用者)のなか、超近代的事務所のなか、倉庫のなか、いたる所でコートジボワール人の不安はつものばかりである」(32ページ)。

なお、フランス語で“conjoncture”は単に「景気」を意味するが、景気のことを話題にすること自体、不景気時にしか行なわれないことであるとして、本書では“conjoncture”は「不景気」の意味で用いられている。

さて、地方から、あるいは外国からアビジャンにやってきた移民たち、またアビジャンで生まれた子供たち、若者たち、その多くはいわゆる定職に就くことはできない。彼らのほとんどはろくな学歴もなく、しかもこの不景気である。にっちもさっちもいなくなるのは当然だ。しかし、とにもかくにも金を稼がないことには生きてゆけない。そこで登場するのが、これら無一文の人々の「イマジネーション」である。「空腹をかかえた下層階級の人々は、おそらくそこで、彼らの物質的状況を改善しようという意志に目覚め」(7ページ)、イマジネーションを積極的に働かせ始める。不景気のアビジャンで生き残るためには、イマジネーションが唯一の武器となってくるのである。

そして、彼らの創造的イマジネーションの具体的結晶が「プティ・メチエ」なのである。とにかく食ってゆかねばならない。「プティ・メチエは、一文無しが生活の危機に直面した際に実践する営利活動なのである」(288ページ)。彼らにとって、この厳しい状況は毎日続くのであり、「プティ・メチエは全世界の何百万人の男女、子供の日常生活に他ならない」(18ページ)のである。

では、アビジャンにはどれくらいプティ・メチエの担い手がいるのだろうか。1976年に約2万5000人だったが、85年には5万3850人に増えたと推計されている。一方、アビジャンで公務員の数は、1976年で3万1840人、85年には5万6940人である。1990年にはプティ・メチエ実践者が7万3430人、公務員が7万7340人になるという(18ページ)。両者の差は実にわずかなものであり、アビジャンにおいてプティ・メチエ実践者と公務員の数が

ほぼ同じになってしまっている。

こうなると、国家サイドとプティ・メチエ・サイドとの競合関係が問題となってくるが、両者の言い分は、本書261ページのアブドゥ・トゥレによる架空の対話に実によく示されている。

『私が君を支えてやっているのだよ』と国家がプティ・メチエの実践者に言う。『君はしばしば許可証なしで働くし、月々あるいは日々の税は少しも払わないし、公道を混雑させる。法に従ってちゃんと仕事をしている商人を相手に、不当な競争を行ったりもする』。

『たしかにあんたの言うとおりで』＜自立的＞労働者は答える。

『でもこのオレだって、あんたを支えてやってんだぜ。だって、もしオレみたいなのがあんたに仕事を見つけてくれて頼んでも、とりわけこんな不景気の時にはとても無理だろう。もしオレたちがこうして通りにいることをやめて、あんたにいろいろ要求し始めたら、きっとあんた方の足元はぐらぐらになるぜ。コミュニスト的暴動になるぜ。オレたちみたいな貧乏人も、まあやっぱり人々のために役立つと思うんだけどね。いったい、オレたちをきちんとさせる方法なんてあるのかい？ だって、法を尊重するにはたくさんの金がいるだろう。それに、あんたは、オレたちをあんた方の開発プログラムか何かのものの数に決して入れたりしないんだから。オレたちのことは放っておいてくれよ。オレたちはオレたちで、路上でうまくやっていくから』(261~262ページ)。

ここで、本書を支えるシェーマをまとめておこう。それは以下のようなものである。

雑多な人口を抱えた大都市＜アビジャン＞で、無一文の人々は＜不景気＞と闘い続けながら、彼らの創造的＜イマジネーション＞を積極的に働かせて、生き残るために＜プティ・メチエ＞を実践していく。

III 社会学的散歩

本書第2章から第18章までの計17章は、プティ・メチエの内容、彼らの働きぶりを具体的に描き出すのに当てられている。この部分は、全290ページ中、実に220ページを占めており、本書の中心部であり、読みどころである。

手法としては、原則として各章ごとに1つのプティ・メチエが選ばれ、アブドゥ・トゥレが個人的に調査した

プティ・メチエ実践者の具体的姿を核にして、その社会的背景を描き出していくという形をとる。また17の章のうち、15の章に具体的なインタビューが1つ、ないしは2つ載せられている。

ここに登場するプティ・メチエの実践者はコートジボワール人をはじめ、マリ人、ガーナ人、ニジェール人、ブルキナ人、セネガル人、ナイジェリア人と多岐にわたる。「同じオリジンを持つ人間は、同じ仕事に就く傾向にある」(21ページ)のであり、国籍とプティ・メチエの種類の対応関係についても触れられている。たとえば、工場廃棄物を利用しての石鹸づくりはマリ人、コーヒー売りはセネガル人、頭にミシンを乗せて歩く巡回仕立屋はガーナ人といった具合である。

年齢も、下はアボボ・ガール市場の足洗い少女ファツマタ・ディアキテの11歳から、上は石鹸づくり老婆ファツマタ・トラオレの、「何歳ですか」「知らんよ」「60歳はいますか」「もちろん」というものまでである。

読者は章を読み進んでいくうちに、いつのまにか自分がアビジャンのなかを散歩しているのに気がつくであろう。第1章の冒頭で、「われわれはアビジャン市内の社会学的散歩を始めるにあたって、まず第1章で不景気という言葉を取りあげなければならない」(29ページ)とあるように、本書の本質は実は「社会学的散歩」にあるのである。読者はアブドゥ・トゥレの案内に従ってさまざまな「通り」に赴き、さまざまなプティ・メチエを目のあたりにして、彼らプティ・メチエの担い手の具体的な声を聴く。

アボボ地区の市場を歩いていると、13歳の少女サタ・シーラに会う。「雨が降ったりすると市場は泥だらけになるからね、みんなの足を洗ってやってお金をもらってるの。洗ってやってる人の爪で自分の指を切ったり、日差しが強い時なんか頭がくらくらしちゃって、結構大変なんだよ。25分とか50分くれる人もいれば、10分とか、ひどい時には5分しかくれない人もいるの。きのうは250分稼いだよ。お金は貯金箱に入れておいて、たくさん貯まったらパーニュとか洋服を買うの」(第6章。なお「」のなかは本文中のインタビューを筆者が抄訳、以下同様)。

トレッシヴィル地区には、ポットにコーヒーを入れて売り歩くセネガル人ハジ・ディオップがいた。「ここはセネガルより金が稼げるっていうんで、去年やってきたんだ。最初、市場で布を売ってたんだけど、中々うまくいかなかったね。それでポットとコップ、それにコップを洗うためのバケツを買ってコーヒー売りを始めたってわ

けさ。でもまだコップを置く皿と、コーヒーを沸かすための鍋はそろってないんだ。コーヒー豆はここのだけで、いれ方はセネガル式でね。客もほとんどセネガル人さ。市場で布を売ってた頃は、毎日市に税金を払わなきゃならなかっただろう。でもコーヒーを通りて売り歩く分には、一カ所に落ち着いてないから税金も払わなくていいってわけさ。それでも時には、オレみたいな行商人も止められて、税金2000^フを払えないと商売道具を取り上げられることもあるんだ」(第15章)。

プラトー地区には、駐車中の自動車誰かにいたずらされないように見張っている12歳の少年クアティ・W・ジョナスがいる(第2章)。頭にミシンを乗せ、手に持ったはさみでカチャカチャ音をたててココディ地区を歩き廻るのは、ガーナから来た青年コフィ・アクワである。このはさみの音をきいて、人々は洋服の繕いを彼に頼みにくる(第5章)。

こうして第2章から第18章までを散歩しながら、われわれはアビジャンで活動しているさまざまなプティ・メチエの担い手に出会うことができるのである。

IV 社会学と社会学的散歩の間

最後に、本書について若干の問題点を指摘してみよう。

まず大前提として、〈不景気〉に見舞われている〈アビジャン〉で、さまざまなオリジンを持つ人々が、生き残るためにそれぞれ創造的〈イマジネーション〉を駆使して〈プティ・メチエ〉を生み出し、実践していく、という先に示したシェーマがある。このシェーマは序説と第1章で語り尽くされているのであるが、いくつかの調査を経た後にこのシェーマが抽出された、というのではなく、最初からアブドゥ・トゥレの頭のなかにこのシェーマが青写真としてあった、という感がぬぐい切れない。

アビジャンの人口構成の多様性、コートジボワールを襲った不況の波、定職に就けない人々が展開するさまざまなプティ・メチエの姿等は、たしかにある程度の資料の裏づけをもって描かれている。しかし、このプティ・メチエを生み出すのが、持たざる者の創造的イマジネーションであるということの根拠は、もっぱらアブドゥ・トゥレ自身の直感、イマジネーションにしか求められない。

さらに、第2章から始まるプティ・メチエの具体的記述のなかにおいて、先のシェーマが検証・確認されてゆくという形をとるが、これもアブドゥ・トゥレの直感に

頼るところ大である。たとえば、「なぜこの仕事をしようと思いついたか」という質問に対して、「先にこの仕事をしてた人から、結構金もうかると言われたから」(第2章)、「前やっていた仕事より、こっちの方がもうかるって聞いたから」(第6章)、「お母さんに言われたから」(第6章)、「祖父、父と代々この仕事をやっている」(第8章)、「友達に誘われた」(第11章)、「この仕事をしている人を見て、真似した」(第15章)等といった答えが返ってきている。これら個々人のレベルの問題としてはアブドゥ・トゥレ言うところの創造的イマジネーションの積極的展開というより、受動的態度ととれないこともない。しかしアブドゥ・トゥレ自身は、これらを彼ら持たざる者の創造的イマジネーションの展開であると捉え、自分の立てたシェーマにますます自信を深めてゆく。

また、各章においてさまざまなプティ・メチエが取りあげられるが、それらは、かなりの数のサンプルをとったうえで、その姿を浮き彫りにしてゆくというのではなく、ほとんどの場合、アブドゥ・トゥレが実際に会った1人か2人の生活風景やインタビューで、その仕事の性格を代表させてしまっている。もちろん、それぞれのプティ・メチエの性格を考慮したうえで、典型的な人物を各章に配置したということも考えられなくはないが、少なくとも本書を読む限り、それぞれ具体的に名前を示された少数の人々の姿が見えてくるだけである。

こうした直観への大幅な依存、方法論の不備により、本書は厳密な意味では社会学の研究書とは言えないかもしれない。

しかし、本書が社会学の研究書でないということは、本書の価値を何ら低めるものではない。つまり見方を変えて、これは学術書などではなく、「社会学的散歩」の本であると心得たうえで読めば、がぜん魅力を持った本となってくる。街をブラブラ歩き廻るようなつもりで読む本だとすれば、少しぐらい直観に頼るのも自然だし、少人数ながらも、各章で人々の具体的な姿を見せ、生の声をきかせてくれるのもなかなかよい。

だいたいにおいて、アビジャンのような大都市の姿を捉えようと思うのなら、まず散歩してみるに限る。湿度が高く蒸暑いし、自動車も多くて運転も乱暴だし、泥棒もたくさんいるし、ナイフ・銃を持った強盗も結構いて、時々びびってしまうこともあるけど、とにかく歩かなければ見えてこないものがたくさんある。

さまざまな資料・統計を駆使した半面、人々の具体的な姿を見失ってしまった人間不在の社会学の成果が多い

なか、社会学的散歩の書である本書の存在価値はきわめて大きいと言わねばならない。

エピソード

路上でプティ・メチエに従事する人々の姿を見ると、まずわれわれとは別の世界に住んでいる人々であると思うことだろう。靴磨きの少年たちは、もう1カ月以上も同じ服を着て、道端に座ってじっとこちらの方を睨んでいる。自動車見張りの青年たちは、運転手が金を払わないで出発したりしようものなら、いきなり険しい顔をして自動車の前に立ちはだかり、右手を差し出して金を要求してくる。バナナ、マンゴーを頭の上の洗面器にのせて売り歩く少女たち、その洋服のチャックはこわれていて背中からはまる出し、もう何カ月もはいているスカートのすそはすり切れて黒ずみ、ひざこぞうや足の裏は道路で鍛えられて、軽石のようにカチカチに固くなってしまっている。

こんな人々をまともに見つめられない人は、まず本書を読んでみるといい。いくらかは彼らに関心が向き、彼らのやっていることを少しは理解できるかもしれない。

次に、もっと彼らのことを知りたかったら、こちらから積極的に声をかけてみることだ。「よう、元気か」、「どうだい、景気は」、「久しぶりだなー、どうしてた」。たいていの場合、彼らは快く応えてくれる。

会話がはずみ、お互いの警戒心がとけたら、もうあなたは相手の眼をまともに見つめられるようになっているだろう。

そして、彼らのうちでとびっきり血の気の多そうな怖いお兄ちゃんの家遊びに行ったら、実は彼が小さな仔犬と2人暮らし（1人と1匹？）で、その仔犬を抱きしめて頬ずりするのを見たりしたら、あなたはそのお兄ちゃんの肩を抱きかかえながら、とっておきの笑顔を彼と共有できるかもしれない。

社会学を始めるのは、それからでも遅くはないと思う。

（慶應義塾大学大学院）